

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 永野文香

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之
文学研究科委員、Ph. D.

副査 福山大学人間文化学部人間文化学科教授 田中久男 Ph. D.

副査 ラトガーズ大学ニューアーク校英語英文学科ジョン・コットン・デйна冠教授
H. ブルース・フランクリン (H. Bruce Franklin), Ph. D.

論文題目

主論文 : **Surviving the World's End:**

Hiroshima, History, and Testimony in Kurt Vonnegut's Nuclear Fiction

(世界の終わりのあとで : カート・ヴォネガットの核小説における歴史と証言)

副論文 : **"Writing after the Apocalypse(s): Utopian Paradox and Historical Narrative in Vonnegut's *Galápagos*."**

(世界の終わりのあとで: ヴォネガット『ガラパゴスの箱舟』にみるユートピアの逆説と歴史のナラティブ)

"Surviving the Perpetual Winter: The Role of Little Boy in Vonnegut's *Cat's Cradle*."

(核の冬を生き抜く: ヴォネガット『猫のゆりかご』のリトル・ボーイ表象)

永野文香君の本論文は1980年代以降本格化した核批評や冷戦文化批評の文脈を踏まえつつ、冷戦期アメリカの作家カート・ヴォネガット(1922-2007)の作品群を「核の表象」という視点から捉え直し、アメリカ文学において歴史的イベントとしてのヒロシマ(およびナガサキ)がいかに語られうるかを検討するものである。

ヴォネガットは従来、アメリカ民主主義の理想に合致したヒューマニストと評されることが多かった。しかし、本論文はヴォネガットの未発表草稿をも含む全作品を精査したうえで、その小説群を環太平洋的な核文学の枠組みにより再定位しようとした意欲的かつ精緻な研究であり、すでに部分がアメリカの権威あるヴォネガット論集に再録されている事実に鑑みても、その国際的な学術的貢献度はきわめて高い。

本論文は、序章と結論を含めて全6章から構成されている。

Introduction

Chapter 1: Little Boy in a Cold War World: The Super-Textuality of the Bomb in *Cat's Cradle*

Chapter 2: The Poetics of Testimony: Time Travel, Memory and Grief in *Slaughterhouse-Five*

Chapter 3: Writing after the Apocalypses: Hiroshima and Historical Narrative in *Galápagos*

Chapter 4: "Bear with me. This is history.": Testimonial Education and the Critique of

Multiculturalism in *Hocus Pocus*

Conclusion

Works Cited

論文の概要

序章では、日米両国における核時代の問題系を再整理したうえでヴォネガットの作品群を概説する。1980年代半ば、ジャック・デリダらの核批評（Nuclear Criticism）は核の表象論的意義を初めて本格的に理論化した。近年批判されるように、核批評は全面核戦争が未だ起こっていないことを前提とし、1945年の広島・長崎に対する原爆投下の事実を捨象した点で、批判対象たるべき冷戦期の文化言説を反復してしまっていた。一方、ヴォネガット作品は1945年の原爆投下をすでに起こった世界の終わりとして描き出しながら、それを生き延びた人物の証言を通じて冷戦期レトリックを批判する核文学として、核批評に対置される。序章では、以上の構図を例証するためヴォネガット作品において物語上もっとも明確な形で核兵器が登場する『デッドアイ・ディック』（*Deadeye Dick* [1982]）を取り上げ、自ら「中性neuter」であると主張する語り手と、作中で炸裂する「中性子爆弾neutron bomb」の相同関係を補助線とし、冷戦文化において「公然の秘密」として不可視化されてきたセクシュアリティ／ジェンダーと核兵器の問題を接続しながら、両者の原点にある「罪」を分析していく。

第一章では、キューバ危機直後に発表された『猫のゆりかご』（*Cat's Cradle* [1963]）を冷戦文化の枠組みにおいて再読し、「原爆の父」ハニカー博士とその息子ニュートの関係性に冷戦レトリックとの相克を読み解く。まず父のせいで小人として生きることを運命づけられたニュートの身体表象と、原子爆弾にまつわる比喩形象の相同を検証することで、この小人が広島に投下された「リトル・ボーイ」の脱修辞化(disfiguration)であることを明かす。さらに広島原爆投下の日（「世界が終わりを迎えた日」）を象徴する「猫のゆりかご」というあやとり遊びが、ニュート（≡核兵器≡猫）をめぐる形成される緊張関係（≡冷戦構造≡ゆりかご）を暗示するという見立てが導き出される。ニュートは「猫のゆりかご」の意匠、すなわち冷戦の修辞学的ネットワークを痛烈に批判するが、これは先に指摘した核批評における広島・長崎の欠落という問題にも確実に対応している。本章ではさらに、歴史という点から作品を精読し、核戦争を「ヒロシマ以後」の文脈に繋留しなおす、本作品の脱修辞化の戦略が論証される。

第二章で扱う『スローターハウス5』（*Slaughterhouse-Five* [1969]）は作家本人が体験したドレスデン爆撃のPTSDを語る自伝的作品と評価されてきた。だが、未発表草稿群や同時代の歴史記述をひもとくなら、この爆撃が公的には秘匿されていた時代にあえて目撃体験を語ることの倫理的な意味が露呈しよう。したがって本章は、作者が採用した二重の構造、すなわち、物語の枠部分で語る作家（語り手）と作中主人公ビリー・ピルグリムという、ふたつの導線を明確に区別し、作品における倫理と詩学の協同関係を読み解く。ビリーの痙攣的時間旅行はドレスデン、ヒロシマからヴェトナム、さらに未来の核戦争へいたる空爆史を補綴し、その連続性を再構成する目撃証言

として理解される。他方、語り手は作中でビリーと交錯し、その証言（の困難さ）を共有しながら読者への橋渡しを試みる。こうした関係性はデリダやポール・リクールという証言の構造に合致する。つまり、ビリーと作家の証言が対位的に配置されるメタフィクショナル異時空間は、20世紀後半の心性“genocidal mentality”（ロバート・ジェイ・リフトン）に抗する倫理的美学として必然的に要請されたものであった。

第三章ではヴォネガットが1984年国際ペン東京大会の翌年に執筆した『ガラパゴスの箱舟』(Galápagos [1985])を、エリザベス・グロスによるダーウィニズム的認識論の枠組みから分析する。先行研究は第三次世界大戦のあとガラパゴス諸島に生まれた、広島被爆者を祖とする新人類の楽園生活を肯定的に見るか否定的に見るかという議論に終始しているが、そうした是非の判断は進化を外在的な価値に結びつけているにすぎない。本作品におけるダーウィニズムの意義は、進化が本来的に予測不能であり「事後遡及的 retrospective」にしか記述し得ないという認識論的枠組みを提供する点に潜む。幽霊レオンは100万年を生き延びたあと、まさに事後遡及的に語りを開始し、この進化が広島被爆者の遺伝子によって駆動されたこと、つまり「ヒロシマというミッシングリンク」の存在を明らかにする。彼の語りは一度死を体験した幽霊という立場を利用し、20世紀のヒロシマを経由したポスト黙示録的世界を描き出す。

最終章となる第四章では、『ホーカス・ポーカス』(Hocus Pocus [1990])が裁判の前に執筆された囚人手記の体裁をもつこと、さらに語り手ハートキが教師であることに注目し、彼の言語行為をショシャナ・フェルマンのいう「証言的教育行為」として検討する。まず、作品における人種や階級の断絶を、19世紀の奴隷反乱や20世紀の刑務所暴動と比較検討することを通じて、より広い歴史的な文脈に位置づけなおす。ハートキは人種的偏見によって脱獄事件首謀者の濡れ衣を着せられると、すすんで「黒人」専用刑務所に留まることを選ぶが、このパフォーマティブな文化的・人種的越境は、不都合な歴史的事実を隠蔽する支配階級に反抗し、その無知を転覆する、反乱的な教育の実践として選択される。またハートキの教育は手記にも延長され、みずからのヴェトナム戦争犯罪や友人の広島被爆体験といった歴史のトラウマを登録していく。

結論部ではヴォネガットの講演活動に注目し、彼がウィリアム・スタイロンや大江健三郎とのあいだで展開したやりとりを検証することで、本論文の各論部分で立証されたヴォネガットの戦略——冷戦期における核の表象批判と生存者の証言へのコミットメント——を再確認する。こうした環太平洋的な読解は、ヴォネガット文学が大筋でアメリカ民主主義の理想を再演するという従来の批評に改訂を迫るものである。

審査の要旨

本学位請求論文は、文学部英米文学専攻における学部時代から大学院時代まで長くカート・ヴォネガットを研究し、以後はフルブライト留学生としてラトガーズ大学ニューアーク校にてさらなる研鑽を積んだ永野君が、徹底した先行研究の調査をもとに独自の視点による分析を深めた、高密度の論文である。ヴォネガットは、アメリカが第二次世界大戦後に世界の覇者として超大国となり、米ソ冷戦構造と核拡散という地球規模の危機的な状況に関わってきた様相を前衛的かつ終末論的な手法で描き出してきた点で現代文学を代表する作家だが、永野君はわけても彼の核小説（nuclear fiction）5編の精緻な読解によって、先行研究がなしえなかった未踏の領域の開拓に成功した。本論文を通読した審査委員一同は事前に互いの審査報告書を交換し慎重に意見調整を行ったうえで、2010年2月24日（水曜日）午後4時より第一校舎106番教室にて、大学院生にも聴講を許す半公開の形式により、約2時間におよぶ口頭試問を行った。

永野論文の目的は、「世界の終末を生き延びる」（“Surviving the World’s End”）というタイトルが示唆するように、ヴォネガット文学から表面的に感得できるかに見える懐疑主義やニヒリズムを一掃し、米ソ冷戦構造や核拡散という現代文明を拘束し麻痺させてきた暗鬱な状況を直視しながら、なおそこに未来の可能性を見ていこうとする作家の強靱なヴィジョンと、テキストに埋めこまれているその声を、丹念な読みによって跡付け提示しようとするのである。この目的を著者は、安易なヒューマニズムに寄りかかることなく、テキストを具象的にコンテキストの中で検証しようとする文学研究の正当な方法を一貫して堅持することで、見事に達成している。すなわち、「アメリカの民主主義と平等を唱道する声としてのヴォネガット」（10）という通説を受け入れて反復するのでもなければ、また、「彼の実験的な文体や、神話的/聖書的な構造に主眼を置いた1960年代以降の批評」（9-10）に追従するのでもない。むしろ永野君は、ヴォネガットが超時空的な想像力と実験的な手法を駆使して「世界の終末以後の世界の創造に取り組んできた歴史的な文脈、つまり冷戦と核保有論（the Cold War and nuclearism）」（10）という、第二次世界大戦後のアメリカが否応なく直面せざるを得なくなった歴史的状況を踏まえ、そのコンテキストのうちにヴォネガットの核小説の意義を考究する方向で、現代アメリカ文学研究に新しい視点を提供してみせる。

この研究を支えているのは、言うまでもなく、本論文の副題にある「ヒロシマ、歴史、証言」（Hiroshima, History, and Testimony）という三位一体的な言説が示唆する、著者のバランス感覚豊かで歴史的に広い眼差しと、ヴォネガットの書簡をはじめ講演やインタビュー、あるいは彼と同時代を生きた作家たちの評言等を、自己の論述を補強する貴重な証言として自由自在に援用する鋭利な手さばきであるが、とりわけ、本論文に頻出する「ヒロシマ」という、核文学を論ずる場では独特の魔力的響きを持つ言葉を武器に

据えた、欧米の批評家たちには譲ることのできない日本人研究者としての視点を見過ごすことはできない。この点が、本論文の価値を高め、迫真性を生み出している源泉と思われるが、それでもなお、原爆投下の2か月前に生を受け、広島に関わりの深い審査委員からは、永野論文と言えども、通常の兵器の怖さとは違う核の深刻な後遺症に対する怖さの認識にやや甘さが残っているのではないかという意見が出た。たしかにアメリカ合衆国には原爆後遺症をめぐる医学的認識の限界があったことは本論文の指摘するところであるが、にもかかわらず広島原爆投下の犠牲者たちは、まさに医学的見地からの差別を受けたくはないがゆえに、自己の被爆体験を語らず沈黙するのが常である。本論考ではヴォネガット自身の広島や長崎に関するコメント、あるいは彼の盟友ウィリアム・スタイロンの経験譚に依拠する発言を証言として引用する著者自身の立場が必ずしも明確ではないため、口頭試問での質疑応答も、とりわけ結論部で援用されるポストコロニアリズム経由の高度に戦略的な立場表明“operational essentialism”を再検討するのに時間が割かれた。その結果、永野君の一見構築主義的な方法論は修辞学的批評や精神分析批評、新歴史主義批評に至るまで理論的先端を注意深く融合することにより編み出され、ヴォネガット本人の依拠したデータの信憑性をも最新の資料に照らして批判的に検証し、北米各地の図書館や古文書館を訪れ入手困難な講演原稿草稿を閲覧して、その加筆訂正箇所に残る問題点をも緻密に分析した成果であることが判明した。とりわけ『スローターハウス 5』のなかには人間的時空間を超越した運命論的ヴィジョンが見え隠れするけれども、永野論文はむしろ作家が未来に向かって現状打開しようとしていく積極的アクティヴィズムをも体現していた点を証明したことも、先行研究には見られぬ洞察として高く評価された。

本論文が全体として、ヴォネガット批評に新鮮な風を吹き込む研究であるのは間違いない。その全体構成は、「序論」に続いて本体を形成する4章、および「結論」から成り、本論のテーマに関連した10葉あまりの写真と小説のタイトルページ等の写真が、読者の想像力を喚起する補助資料となるように巧みに配置されている。

「序論」では、ヴォネガットの50年に及ぶ作家歴のデビュー作である短篇小説「バーンハウス効果についての報告」(“Report on the Barnhouse Effect”, 1950) から論を説き起こし、第10番目にして半自伝的かつメタフィクショナルな長編小説『デッドアイ・ディック』が、本論文全体のテーマに絡む「冷戦ナラティブ」(the Cold War narrative)の典型として、ヴォネガット文学の特質を顕著にのぞかせていることを明かす。続く第1章では、世界終末の隠喩である「ヒロシマ」の再現としての最終兵器「アイスナイン」がもたらした世界終末を目撃するディストピア小説『猫のゆりかご』を、核の想像力を元手に悪夢的な冷戦構造に立ち向かう作品として位置づける。この章の原型となった日本アメリカ文学会の学会誌英文号発表論文は国際的にも賞賛され、北米を代表する学者批評家ハロルド・ブルームの編集するヴォネガット論集に再録された(チェルシーハウス社、2009年)。第2章は、第二次世界大戦中の彼のドレスデン体験を基にした

『スローターハウス5』を対象として、死の兵器製造の持続状況に対する作者の黙示録的なヴィジョンを、「死との舞踏」のイメージに引きつけて克明に考察し、最も印象的なリフレインである“*So it goes*”のうちに死者への哀悼の深さを読み込む。ガラパゴス諸島訪問体験を活かした『ガラパゴスの箱舟』を分析した第3章では、西暦1001986年というポスト・アポカリプス的な視点から、アシカのごとき姿に変わり果てた人類の進化の中に、19世紀後半から第二次世界大戦にかけてジェノサイドの口実となった社会進化論のパロディを読み込む。『ホーカス・ポーカス』に焦点を当てた第4章は、歴史の証言者という孤独な営みを引き受けた主人公のうちに、作者の歴史認識の代弁者としての声を聞き取ってみせる。「結論」では、ヴォネガットと大江健三郎の対話から環太平洋的視点を抽出し、冷戦と核武装理論のレトリックを脱構築することで「ヒロシマ」という歴史の証言者の声を復権しようとするヴォネガット文学の特徴を総括している。

審査委員会がまず瞠目したのは、1980年代にポスト構造主義の視座に立つ核批評の先駆けとなったジャック・デリダが論文“*No Apocalypse, Not Now*”（1984）において、現時点では「世界の終わり」が未だ到来しておらず、到来したとすれば全面核戦争によってそれを語る主体すら消滅してしまうと断じた前提を徹底批判するところから本論文が発し、ヴォネガットがまさに『猫のゆりかご』以降の核小説群では「世界の終わりの後」を想定して書き続けたことを強調する戦略である。21世紀に入り、9.11同時多発テロによってニューヨークに生じた新たな「グラウンド・ゼロ」が、核兵器とは無縁なのだから一種の比喩の濫用すなわち濫喩であるにもかかわらずその名で罷り通り、アメリカ合衆国に新たな戦争の口実および核保有独占の大義名分を与え、まさにそれによって本来の意味を担うヒロシマ、ナガサキの記憶が抑圧ないし矮小化されてしまったからこそ、核批評の理論およびヴォネガットに代表される核文学の研究はますます重大な意義を帯びていることを、著者は説得力豊かに示す。その野心的にして学際的なアプローチは、綿密な調査と流麗な英文により、旧来のヴォネガット研究がアメリカ中心主義を、旧来の核批評が西欧中心主義を免れなかった限界を突破し、ヒロシマ、ナガサキを復権させる環太平洋的な核批評の理論をみごとに創出した。

以上、永野文香君の本論文は、ヴォネガット文学の全体像を射程に収め、先行研究との対話を十分に織り込みながら独自の視点を打ち出した点で、十分に学位に価する。公刊に際しては、冷戦構造の負の遺産として現存する核の後遺症やそれを告発するアメリカの作家たち——例えばレスリー・マーモン・シルコウやサイモン・J・オーティーズ等——の文学に対して、ヴォネガットがどのように見ていたのかという問題を盛り込み考察すればさらにスケールの大きな研究が約束されることを、審査委員一同、堅く信じて疑わない。